

齊藤国治さんと古天文学

長谷川一郎

「古天文学」という名称については齊藤さんと私は度々議論をした。古生物学や古磁気学などは言葉のニュアンスが違うので、この名称は適切ではないというのが私の論点であった。齊藤さんが古天文学の名称を考えた理由は「古天文学の道」(1990年)の「はしがき」に述べてある。

齊藤さんは、東京生まれの東京育ちで、生粋の江戸っ子で、さっぱりしたご性格の人であった。私が初めて齊藤さんに出会ったのは、1958年の金環日食を種子島の門倉岬で観測されていた時であったが、親しくお話をしたのはそれからずっと後のことであった。1974年に定年退職された後、齊藤さんは天文古記録の調査を始められたが、その前、まだ天文台におられた時、明治以後の日本の日食観測、明治七年の金星の日面通過の観測や明治十年の火星と西郷星、及びハレー彗星の観測など、歴史的な記録を詳しく調査されたことがあった。齊藤さんは、もともと歴史が好きだったのだろう。学生の時、平山清次教授が蕪村の俳句を例にひいて、月が天頂の最も近くを通る時の計算をしてみせられたことが心に残っていて、これが「古天文学」を始める遠因となったと書いておられる(「古代の時刻制度」1995年)。

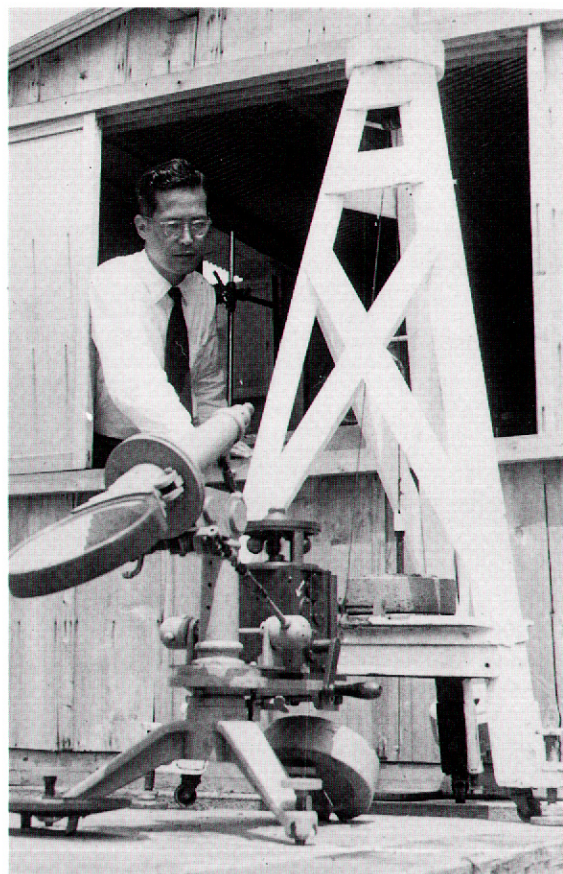
また、東京天文台に入って、天文古記録や古暦の研究をしていた小川清彦氏を知ったことも遠因の一つになったのだろう。齊藤さんは度々雑誌などで小川氏の業績を紹介し、1997年には、小川さんの研究を広く世に知らせようとして、小川清彦著作集を編纂し、解説をつけて出版された。84才になられた時のことである。このことは齊藤さんが、不遇であった小川さんを常に敬慕し、氏の業績を高く評価しておられたことの表れであろう。そして、日本書紀の640年の「星入月」がアルデバランの星食であるという小川さんの50年も前の計算と同

じ結果を得たことに大いに自信を持ち、その後の「仕事は一気呵成に捗り、1982年夏からはコンピューターを導入し」て、日本のみならず、朝鮮、中国、の天文古記録の検証を進められた。このようにして、齊藤さんは、小川さんの道の「再建を企て」られたのであった。

しかし、天文古記録を、現在の理論に基づく計算方法によって検証し、実証することは当然の帰結を得るのみであって、殊更に議論することもないという考えが、かつてはあった。従ってこの種の研究から新しい知見を得ることは、ほとんどないと考えられていた。それを取返して齊藤さんは実行されたのである。そして、齊藤さんは天武十年九月十七日(681年11月3日)の火星が月に隠されたという現象は、11月4日の午前2時ごろの現象であったことを確かめた。これは当時は午前3時頃から日付が変わったということを実証するのによい例であったのである。

齊藤さんは、非常に精力的に調査と計算を進められ、それは300冊以上のノートになったという。そして、そのテーマは多岐にわたり、齊藤さんは多くの著作をつぎつぎと出版された。そのご努力には敬服のほかはない。ある時、奈良の橿原市の南部にある益田岩船を見に来られたことがあって、私も一緒したことがあった。そして、この遺跡や酒船石を天体観測を行った所だろうと考えられたが、私はそれは無理な考えでしょうと遠慮なく申し上げたのだが、齊藤さんは私のような失礼な言い分でもよく聞いて下さる大きな包容力をお持ちであって、私は齊藤さんの新説にはよく反論したのであった。それでも、齊藤さんは、雑誌に寄稿されたものをコピーしては絶えず送って下さった。

ところで、天文月報に掲載された大橋由起夫氏の「歴史天文学」という名称の提案(1999年4月



種子島金環食（1958年）
齊藤先生と写真分光器

号)には、なぜかすぐには反論をお書きにならなかつた。それで、私は齊藤さんの反論を促す意味で、重ねて「古天文学」はよくないと書いたのである(2000年4月号)。そうしたら、これにはすぐに反論をお書きになった(2000年6月号)。そして、最後に「87歳の弱者をあまりイジメないでください」と書かれてしまった。これには私も些かまいった。私を知らない読者は、長谷川という奴は、どんな

悪い奴だと思ったことだろう。しかし齊藤さんは親切でやさしい人である。私も関係している「天界」(東亜天文学会)にも1989年頃から度々寄稿していただき「編集がスムーズに行くように今後は原稿で応援しましょう」と言って下さったのである。この結果、齊藤さんとなつたりを持つ若い人からの投稿もあって、「天界」に天文古記録に関する研究の掲載が続いたこともあり、今でも時々続いている。

「古天文学」の名称についても、井上猛氏や佐藤明達氏の提案があり、大崎正次氏のPalaeoastronomyでも良いのではないかとの取り成しもあって、学術用語集天文学編(1994年)にこの言葉が採用された。齊藤さんは、このことをとても喜んでおられたのであるが、申し訳ないが、私はまだ賛成しかねている。

齊藤さんは、「老後の趣味としてやりがいのある仕事」で「可成りの苦勞と失敗といくらかの満足感を伴いました」と書いておられるが、本当は十分に満足しておられたと私は思う。ただ対象とする天文古記録は膨大な数になるので、これを一人で取り扱うことは、到底無理なことであろう。「天界」に最後の原稿を送っていただいた時(2002年)、「2001年7月で88才になりました。投稿も今回で最後になりましょう」と書いて来られた。もちろん私は、もっと続けて下さいとお願いしたが、本当にこれが最後になってしまった。

私は随分、無遠慮なことを申し上げたが、それ以上にたくさんの方のことを教えていただいた。心から御礼申し上げたい。そして、今後も多くの人々が、齊藤さんの志をついで、天文古記録の調査と研究を広げて行くことを切望しつつ齊藤さんのご冥福をお祈りしたいと思う。

(大手前大学 社会文化部)